

施設イチゴの保温開始期について

第1報 保温開始期が品種に及ぼす影響

佐藤照美・山田芳文・佐藤 如 (大分県農業技術センター)

Terumi SATO, Yoshifumi YAMADA and Hitoshi SATO: Starting Time of Keeping Warm by Covering of Forcing Strawberry.

1. Effect of Starting Time of Keeping Warm by Covering on Growth and Yield of some Strawberry Cultivars

イチゴの花芽分化を確実に促進させ、早期多収を狙ったポット育苗での栽培普及が著しいが、定植後の管理、特に保温開始期の早晩による生育や収量、品質に及ぼす影響は大きい。そこで、主要品種における保温開始期を検討したので、その結果を報告する。

1. 試験方法

品種は“宝交早生”“はるよい”および“とよのか”を用い、6月中旬、山砂2：くん炭1の用土を用いた4号黒色ポリポットに挿苗した。育苗中はN成分で100～120mg/鉢を施し、雨よけハウス下で育苗した。定植は花芽分化直後に行い、保温開始は1983年では10月11日、21日、31日、1984年では10月9日、19日、29日とした。温度は保温開始後から日中25℃で換気を行い、冬期は最低5℃とした。供試ハウスは開口6m、奥行25mの南北棟を3棟用い、11月中旬より一層カーテンを装備した。

2. 試験結果および考察

保温開始後の生育をみると、11月中旬までは各品種とも早期保温(1983年度10月11日、1984年度10月9日)で優れたが、その後の生育に差はみられなかった。一方、展葉は早いほど早く、保温開始に正比例した。

各花房の出蕾をみると、頂花房は保温開始に正比例したものの、腋花房は保温開始期に未分化であった“宝交早生”で遅れ、むしろ、晚期保温(1983年度10月31日、1984年度10月29日)ほど早くなった。“はるよい”“とよのか”は、腋花房分化期であった中期保温(1983年度10月31日、1984年10月29日)で早く、早期保温では出蕾に株間差が生じ、晚期保温では遅れがみられた。

なお、第3花房は“宝交早生”で遅い保温ほど早い傾向がみられ、“はるよい”は一定の傾向がみられず、“とよのか”では収穫始期、1果重、温度管理等で年次差が

みられた。これらの保温開始期と各花房の出蕾傾向は開花や収穫始期と同じであった。

収量では、各品種とも早期保温で年内収量、総収量とも高まる傾向を示したが、頂果房での小玉果(高温期肥

第1表 保温開始期と出蕾・開花期

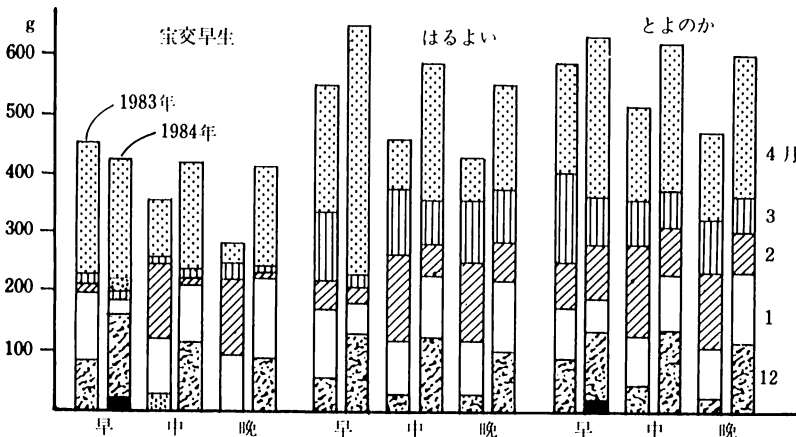
品 種	保温開始期	頂 花 房		腋 花 房		第 3 花 房	
		出蕾期	開花期	収穫始	出蕾期	開花期	出蕾期
宝 交 早 生	年月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日
	1983.10.11	10.27	11.6	12.13	1.5	2.13	2.23
	1984.10.9	10.23	11.2	12.3	1.24	2.12	3.1
							3.17
は る よ い	1983.10.21	11.3	11.14	12.26	12.15	1.4	—
	1984.10.19	10.28	11.7	12.11	1.15	2.4	3.5
	1983.10.31	11.8	11.21	1.4	12.11	12.28	—
	1984.10.29	11.1	11.12	12.16	1.12	1.30	2.27
と よ の か	1983.10.11	10.24	11.5	12.15	12.29	1.19	2.19
	1984.10.9	10.23	11.3	12.4	12.31	1.22	2.8
	1983.10.21	10.31	11.12	12.26	12.24	12.16	—
	1984.10.19	10.26	11.5	12.8	11.27	12.14	2.10
宝 交 早 生	1983.10.31	11.2	11.14	12.26	11.30	12.20	—
	1984.10.29	10.29	11.10	12.14	11.30	12.17	2.9
	1983.10.11	10.23	11.2	12.11	12.8	12.29	2.10
	1984.10.9	10.20	10.27	11.3	11.25	12.8	1.28
は る よ い	1983.10.21	10.31	11.11	12.19	11.17	12.3	2.1
	1984.10.19	10.24	11.2	12.3	11.15	11.27	2.2
	1983.10.31	11.3	11.13	12.21	11.24	12.11	1.25
	1984.10.29	10.25	11.6	12.7	11.19	12.1	2.3

(20株平均)

大による)の発生や2～3月期に中休み現象がみられ、晚期保温は年内収量低く、総収量でも最も劣り、中期保温が最も安定した収量構成を示した。

以上のことから、保温開始期を決定する場合は、各品種とも年内収量および総収量を狙う場合には早い保温(10月10日頃)がよく、2月まで早期多収と安定した生産(生育・収量構成)を上げるためには、各品種とも腋花房分化後の保温開始が望ましい。

なお、“宝交早生”では、他作目との組合せを考える場合、年内多収(頂果房多収)が望まれるため、早期保温(10月10日頃)がよい。



第1図 保温開始期と収量(株当り)